

二人の脱獄者

蒼穹に響く銃声と終焉の月

九条菜月

Natsuki Kujo

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 伊藤明十

目次

序章	9
第一章	22
第二章	47
第三章	63
第四章	83
第五章	101
第六章	118
第七章	138
第八章	164
第九章	184
終章	207
あとがき	212



キャラクター紹介



カルティナ・バシユレ

(一等兵)

第三監房棟所属



クロラ・リル

(一等兵)

別名多数あり。16歳で成長が止まった外見を生かして、潜入調査に従事する



サルバ・ラケール

(大尉)

第三監房棟所属



セリオ・アバルカス

(少尉)

第一監房棟所属

レジェス・ハイメ

(一等兵)

第一監房棟所属

プラス・プラト

(一等兵)

第二監房棟所属

セルバルア・ゼータ

(グルア監獄所長)

ディエゴの天敵 (?)

ディエゴ・クライシュナ

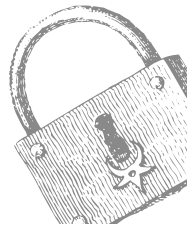
(中佐)

クロラの上官。第六連隊隊長

二人の脱獄者

蒼穹に響く銃声と終焉の月

序章



いつか還る 懐かしき空

届けておくれ 旅鳥たちよ

風に乗せ わたしの声を 愛し子に

いつか還る 懐かしき海

届けておくれ 旅鳥たちよ

波に乗せ わたしの心を 愛し子に

いつか還る 愛おしき腕

届けておくれ わたしの想いを

夢に乗せ 静かに眠れ 愛し子よ

永久に 永久に

月の光のように繊細な歌声が、闇夜に紡がれる。

優しく、悲しく、慈しむように。万感の想いを込め、祈るように――。

「……母さん？」

夜半、目覚めてみれば母の姿はなかった。またか、と溜息を零す。白髪の少年は躊躇った末にベッドから小さな足を降ろした。ひんやりとした床に、ぶるりと体を震わせる。

窓から差し込む月明かりを頼りに、少年はランプの明かりが微かに漏れる部屋へと辿り着く。扉を開けると、寝間着のまま実験机に向かっている母の背中が見えた。

手元を動かしながら、無意識のように口ずさまれ

る歌。少年は戸口に立ったまま母に声を掛けた。

「母さん。眠らないと駄目だよ」

声は思いの外、大きく響いた。しかし、手が止まる気配はない。

「母さん」

無駄だとわかっている、呼ばずにいられない。

研究者である母は、食事と睡眠以外、実験机に向かっているような人物だった。閃きがあれば、その睡眠ですら蔑ろにしてしまう。

体調を崩して倒れるのは日常茶飯事で、その度に掛かりつけの医者に運び込まれた。はじめは親身になつて色々と忠告してくれた医師も、今では呆れ顔だ。

「母さん……」

山間ということ、夜は冷える。もともとあまり丈夫ではない母だ、寝間着のままでは風邪を引いてしまうかもしれない。寝室に戻った少年は、椅子に掛けてあつた母の上着を手に取った。そして、研究

室へと駆け足で戻る。

研究に没頭している母に上着を手渡したところで、床に捨て置かれるだけだろう。少年は丸椅子を引き摺ってきて、それに上った。これなら母の肩に手が届く。上着が落ちないようにしっかりと掛け、間近でその横顔を眺めた。

「母さん」

返答はない。母の眼に自分の姿は映らなかつた。いつもそうだ。母の脳裏を占めるのは、研究の二文字。たまにこちらへ意識を向けてくるが、それも日に一度か二度あるかないかだ。まったく会話のない日も珍しくはない。

「お休みなさい」

せめて少しでも寒さを凌げるようにと、扉をきつちり閉めた。暖炉に火を入れられれば一番いいのだが、母が生活費の大半を研究に注ぎ込んでしまうので、薪を買う余裕はない。

月明かりに照らされた廊下は静まり返っている。

ここは町外れの一軒家だ。暮らしているのは自分と母の二人きり。

母がなにを研究しているのかはわからない。ただ時々、見知らぬ男たちがやってきて、土の入った大量の袋を室内に運び入れていた。たぶん研究に必要なものだ。

少年は扉に背を預けるようにして、その場に座り込んだ。不思議と眠気は襲ってこなかった。だからもう少しかだけ。もう少しかだけ、母の傍にいたかった。たとえここに自分がいると、気付いてもらえなくても――。

どず、という鈍い音と同時に、脇腹わきばらに痛みを感じた。続いて浮遊感に包まれたかと思うと、背中と腰に衝撃が走る。とっさに眼を開けば、木張りの床が見えた。

「あー……」

痛みを堪えながら体を起こしたクロラ・リルは、残っていた眠気を、雪のように真っ白な頭を左右に振ることで吹き飛ばした。なぜ、ベッドから落ちたのか。

先ほどまで横たわっていたベッドを確認すれば、そこでは一応、先輩になるプラス・プラトがすやすやと幸せそうな顔で寝息を立てていた。元凶であろうクロラを蹴り飛ばした足は、半分以上がベッドからはみ出ている。

「そういうや、昨夜は……」

同室者を怒らせてしまったから泊まらせると、プラトが押しつけてきたのだ。

椅子を二つ使った簡易ベッドの作成が面倒だったのか、プラトはクロラのベッドを占領しようとした――が、クロラの同室者のひと睨にらみによりしぶしぶと半分を明け渡した。狭い、狭い、と文句を背中に聞きながら、そのまま枕を並べて眠りについたのだ。

「夜中に蹴り落とされなかっただけ、ましか」

床に座ったまま、クロラは大きく背伸びする。反対側のベッドに、同室者の姿はなかった。毛布もきれいに畳まれていた。

「ハイメさんは早番だったな……って、もうこんな時間か」

壁の時計を見れば、勤務開始の時間が迫っていた。肩や背中の痛みを堪え、クロラは未だに夢の中にいるブラトの体を揺さぶった。

「ブラス先輩。遅刻しますよ」

今なら朝食を抜けば、ぎりぎり時間で間に合う時間だ。二十歳前後のやや小柄な青年は、なぜか枕を抱きかかえ「バシユレさあ〜ん」と頬摺りしている。正直、朝から見たい光景ではない。張り倒したい気持ちも堪え、声を掛ける。

「ブラス先輩！」

「ん、むむむ、わかってる、わかってるって。君のことも大好きだから。うひひひ」

全身を大きく揺すってみるも、聞こえるのは不明瞭な返答ばかり。いつそのこと、このまま放置して部屋を出てしまおうかと、不穏な考えが脳裏を過る。しかし、今の性格設定ではそれも叶わない。肩を疎めて、クロラは奥の手を使った。

「ゼータ所長に崖から吊るされますよ！」

「ひい！」

ブラトは飛び上がらんばかりの勢いで体を起こした。そして、真つ青な顔で辺りを見回す。

「俺、高所恐怖症なんだよ！」

「そうなんですか。じゃあ、もしもの時は、海面ぎりぎりに吊るしてもらえようお願いしますね。あ、早く用意しないと遅刻しますよ」

「へ？」

「だから、遅刻」

一瞬、惚けた顔をしたブラトだったが、クロラの言わんとすることに気付いたらしい。焦った顔で、真つ先に短く刈り上げた髪を整えだす。

まずは着替えが先ではないのか、とクロラは内心で嘆息した。

「クロラ、お前もなに悠長ゆうちやうにしてんだよ！ 急がないと遅刻だぞ、遅刻！」

「今日は休みです」

「裏切り者め！」

昨夜のうちに、ちゃんと翌日は休みだと告げたのだが、ブラトの耳には入っていなかったようだ。「じゃ、じゃあ、レジエスは？」と訊きかれたので、正直に「ハイメさんなら早番ですよ」と答える。断末魔に近い呻うめき声が漏れた。遅刻仲間がいないことに絶望したようだ。そんなことをしている暇があるなら、さっさと部屋に戻って着替えればいいのに。

「ああつ、寝癖ねくせが直んねえ！」

「……いつもと変わりないと思えますが。どこに問題が？」

「変わるんだよ。ここ！ 前髪がぴんつとしてねえだろ！ 大問題だ！」

「はあ」

ブラトは大声で反論しながら、持参してきた手鏡で必死に寝癖を直す。朝っぱらから元気なことだ。

「よし、あとは着替えるだけだ。街に行くんだったら、美味うまい土産みやげをよろしくな！」

納得のいく髪型になったのか、ブラトは威勢よく部屋を飛び出していった。寝癖も部屋に戻ってから直せばいいのに。一人取り残されたクロラは、疲れた笑みでそれを見送る。

急に静けさを取り戻した室内で、クロラは床に座り込んだままなんとはなしに天井てんじやうを見上げた。

「ここに来て、もう一ヶ月、か」

グルア監獄——サライ国の軍部が管理、運営する軍人や政治犯専用の刑務所だ。

本土から船で半日ほど掛かる孤島。正確な位置は限られた者にしか知らされておらず、グルア監獄への航路は熟練の船乗りたちでさえ眉まゆを顰ひそめるほどに荒い。脱獄はできても、島からの脱出は不可能だと

言われる所以だ。

そんな鉄壁を誇るグルア監獄には、不名誉な通称がある。

軍人の墓場

上官の不興、もしくは妬みを買ってしまった者や、不始末をしかした者たちが見せしめとして送られる場所でもあるのだ。

一度、グルア監獄に配属されたらまず出世は見込めない。配置換えの希望もよほどのことがないかぎり受理されず、島を出るには退役以外に方法は残されていないのだ。

軍人であれば誰もが忌避するグルア監獄——それが軍部の頭痛の種となったのは、今年に入つてのことだった。

グルア監獄に対する、巨額の予算割り当て。上層部によって、軍内部にすら隠されていたその情報が流出してしまったのだ。それに食って掛かったのが、議員たちである。

議会は、軍費や兵士の数を削減し、国内の産業に力を入れようと主張する改革派と、他国に睨みを効かせるためにも軍の力を削ぐわけにはいかないと主張する保守派に分かれている。改革派の議員たちは、ここぞとばかりに軍部を責め立てた。

現在、軍は殴り込みを掛けんばかりに勢いづく議員たちの対応に苦慮中で、グルア監獄に調査官を派遣するなど、苦しい時間稼ぎを行っている。

そして、グルア監獄に隠された謎に注目したのは、議員たちだけではない。サライ国軍第六連隊長、デイエゴ・クライシュナ。クロラの上官である彼は、機密書類が流出する以前からグルア監獄にはなにかあると感じていた。

しかし、上層部が隠している機密事項だ。下手に動いて眼をつけられようものなら、いくらデイエゴでも太刀打ちはできない。静観していたところに、今回の騒動が持ちあがったのだ。

これをきっかけに、グルア監獄への予算配分が見

直されるならば問題はない。だが、ずるずると続くようであれば、いずれデイエゴが権力を握った際の足枷となる恐れもある。

グルアにはなにかがあるのか。隠匿されている秘密を探るべく送り込まれたのが、第六連隊第十部隊所属、ファン・アティリオ少尉——クロラだ。登録名が偽名で現在名乗っているのが本名という、いささかややこしいことになっているが、なにぶん時間がなかったのだからしかたない。

第十部隊は密偵を専門としている。そこに長く所属しているクロラも、密偵として業績をあげること少尉までのしあがってきた。任務に合わせ、いくつかの偽名を持っているが、今回はそれらの使用をすべて禁じられてしまった。

しかし、新しいものを用意すると体に馴染むまで時間が掛かり過ぎる。

名前を呼ばれ無意識に反応するようであれば、任務では使えない。相手にささいな違和感を持たれ

るだけで命取りとなる場合もあるのだ。疑わしきは排除する——猜疑心の強い人物なら、それくらい徹底して当然だ。

最後の手段として残ったのが本名、クローラ・リルダだった。

不当な予算配分に関わっているとされる、グルア監獄所長セルバルア・ゼータはそこまで徹底しなければ騙せない相手だった。

目立たないことが密偵の基本だが、今回ばかりは己の能力を隠すな、と命令されている。出し惜しみは逆に相手の不審を買う、と。

そしてクロラは、十代半ばで成長の止まってしまった幼い外見を生かし、配属そうそう軍人の墓場行きとなった不運な一等兵として、グルア監獄にやってきたのだった。

「つと、そろそろ行かないと朝飯を食いっぱぐれるな」

夜勤あがりの者たちのために、朝食は長めに時間

が取られている。休日ではあるが兵卒用の軍服に袖を通したクロラは、男子寮の自室を出る。休み以外の者たちはすでに出払っていると思いきや、ブラトと同じ寢坊組が猛然と廊下を走り抜けて行った。規則正しい生活を基本とする軍隊では本来あり得ない光景だ。

「……慣れって怖い」

着任当初は、ここは本当に軍の管轄なのかと眼を疑う光景に何度も遭遇し、その度に啞然としていたものだが、一ヶ月経った今では軽く流せるようになってしまった。

ただ、慣れるのはいいが、この雰囲気だけでは染まりたくないものだ。潜入の期限は半年とされている。それが過ぎれば、理由をつけて本土に呼び戻されることになっていた。

次の潜入先が万が一、また軍内部だったとしたら。矯正するのが大変そうだ。

「しかし、きれいになったもんだな」

クロラは掃除の行き届いた廊下を眺め、ぼつりと呟いた。はじめて男子寮に足を踏み入れた際、間違つてゴミの廃棄場に来てしまったのかと絶句したものだ。

廊下の至るところにゴミが散乱し、思わず鼻を押さえたく——むしろもぎ取りたく——なるほどの腐敗臭を放っていた。物臭な一部の入寮者が、室内のゴミを廊下に放置したことがきっかけだったらしい。清掃を買って出るだけの親切心を持つ者もなく、常識的な者は寮を出て街に部屋を借りた。

少なくとも数年間、ゴミ捨て場状態で放置されていた男子寮が元の姿を取り戻したのは、数日前だ。新入りの歓迎会と模擬訓練を兼ねた実地演習でのこと。

グルア監獄側と襲撃者側に分かれて行われたそれで、襲撃者側だったクロラが勝利を収めた。その報酬として、一つだけ願いを叶えてもらえるという権利がクロラに与えられた。

願ったのは、男子寮の清掃。

グルア監獄所長、セルバルア・ゼータは男子寮の惨状を噂では聞いていたが、実際に眼にするのははじめてだったらしい。その顔は端から見てわかるほど、嫌悪に歪められていた。

以来、所長命令で定期的な清掃が義務づけられる運びとなった。怠惰な者たちからは絶望の悲鳴が、そして、悪臭に悩まされ続けていた者たちからは歓迎の歓声があがったのだった。

男子寮を出ると、目の前には広大な海が広がっていた。寮のすぐ傍が崖となっているため、海がより間近に感じられる。

そういえば、ずいぶんと懐かしい夢を見た。

あれは子供の頃——まだ母親と一緒に暮らしていた時の記憶だ。似ていたのは緑の瞳だけ。髪や肌の色は、名前も顔も知らない父親の血を色濃く受け継いでしまった。

顔の造形は親子なのだから、似ている箇所はあつ

たのかもしれない。だが、研究一筋だった母親は、気付けばいつも実験机に向かっていた。顔を合わせるのには食事の時だけで、それも自分の分を平らげると、あとは気にもとめずさっさと研究室に戻ってしまふような人だった。

祖父に引き取られてからは顔を合わせることもなかったので、記憶に残る母親の顔は曖昧だ。

「いつか還る 懐かしき先」

母がいつも口ずさんでいた歌。よほど思い入れのある曲なのだろう。あまりにもよく歌っていたものだから、気付けばクローラもそれを口にするようになっていた。

「届けておくれ 旅鳥たちよ」

久し振りに見た夢のせいなのか、クローラは人のざわめきが聞こえてくるまで、懐かしい旋律を歌い続けた。

私服に着替えたクロラは、無人の通用門を潜り抜けた。刑務所にもかかわらず警備兵がいないなんてあり得ない——と、驚くだけ無駄だ。

グルア監獄島は瓢箪ひょうたんの形をしている。真ん中のくびれを挟んで片方には監獄が、もう片方には街がある。

島唯一の船着き場は、通用門から出て左側のくびれた部分にあった。坂道を少し歩くと、眼下に街が広がる。視界にすっぱりと収まってしまう程度の小さな街だ。

海沿い独特の真っ白な住宅が、島の起伏に沿って並んでいる。そのせいか街の路地はやたら入り組んでおり、階段や坂も多い。とはいっても狭い街なので、迷う心配は少なかった。

街の設備は本土の都市よりやや劣るくらいだ。軍の刑務所があるということで、街にも予算の一部が回されているのだろう。休みの度に色々と回ってみたが、過剰かじょうに金が掛けられているような場所はな

かった。

それは監獄の敷地内にも言えることで、今のところクロラの気を引くようなものはなにもない。とすれば、次に搜索すべき場所は建物の内部か。本棟あたりが怪あやしいな、とクロラは次の搜索場所の目星をつけていた。機会があればいつでも忍び込めるよう、準備は怠おこたっていない。

島から本土への交通手段は、月に一度やってくる定期船以外にない。専用の護送船ではなく、罪人もその船で護送されてくるというのだから驚きである。島は暗礁あんしやうに囲まれていて、接岸できるのは一箇所のみ。それも、中型以下の船に限られている。

輸送に頼るだけでは生活できないため、島の東側にある畑では潮風に強い作物が育てられていた。これは監獄でも同じで、受刑者たちの仕事には農作業も含まれている。

漁業も行われているため、万が一、輸送が滞っても、ある程度ならば自給自足で暮らしていくことは

可能のようだ。

街に入ると、通りで遊ぶ子供たちの姿が見えた。大人たちはそれぞれ仕事で出払っているようで、外を歩く住人の姿は数えるほどしかない。いつもと変わらぬ光景だ。

本日の買い物は、支給品以外の消耗品の補充。

プラトへの土産は……むりだな。一等兵の給料は雀の涙ほどだ。他人を氣遣っている余裕はない。

目的の雑貨屋で、石鹼と歯を磨くための粉等を手に入れる。これらのものは原材料を輸送に頼っているため、購入制限がされていた。面倒だからと買い溜めはできず、定期的に街で購入しなければならぬ。

なんでも昔、監獄のとある兵士が石鹼を買い占め、倍の値段で同僚たちに売りつけるといふ、悪徳商法紛いの事件があったそうだ。

愚かなことだ。売り切れにならない程度に購入し、石鹼を買い忘れた、または石鹼を買いに行く時間の

ない者たちに的を絞り、三割増しで取引すればよかったのに。一度に手にできる金額は少ないが、問題にされにくいやり方だ。

一攫千金は大好きだが、現実には厳しい。少なくとも、金額が高くなるにつれ危険の度合いも比例して上がる。自分のようにのつびきならぬ事情があるわけでもない限り、地道に稼いだ方がよほど堅実だ。

「あと買う物は……」

休みは十日に一度なので、できるだけ買い忘れは避けたい。そんなことを考えながら、さびた看板が目印の雑貨屋を出た時だった。背中に強い視線を感じた。

「！」

反射的に周囲を見回すが、眼に見える範囲に不審な姿はない。殺意は感じなかった。そうでなければ、元軍人だった祖父に鍛え上げられた体は即座に反応し、考える前に動いていただろう。

「気のせいかな？」

クロラの外見は、黒い髪に黒い眼が大半を占めるサライ人の中では異質だ。

黒以外の瞳の色や褐色かっしやくの肌だけなら、他国との交流が盛んな港町辺りでは珍しいものではないが、雪のように真っ白な髪はその他国でも珍しい。そのせいで注目された可能性もあった。

しかし、それはすぐに否定されることになる。

行く先々で、クロラは誰かに見られている——見張られているような視線を感じた。

気付いていない振りをして辺りを捜すが、相手はなかなかの手練れてだのようで視界とらに捉えることすらできな

くない。

「まさか、ばれたのか？」
不穏な考えが脳裏を過るが、グルア監獄に配属になってから、クロラは密偵として怪しまれるような行動はしていない。気付かれたと考えるのは早計だ。可能性があるとすれば、密偵ではないかと疑いを掛けられているくらいか。それにしても尾行をつ

けるタイミングが遅いような気がするが……。

わざと人気ひとけのない場所に誘い込んで正体を突き止める、といった方法がないわけではない。だが、手がわかったところで、今のクロラにとつて利点はないもなかつた。

あくまでも、疑われているという前提で慎重に動けばいいだけの話である。

「となれば、今日はさっさと帰るか。買い物も終わったしな」

もう少し街を見て回りたいところであるが、このままつきまとわれるくらいなら、用事を済ませさつさと寮に戻った方が賢明だろう。

そうと決まれば行動は早かつた。買い忘れがないことを確認したクロラは、監獄に向かつて歩き出す。昼食は街で取る予定だったが、それも変更へんとうだ。心持ち足早に街を出ると、不思議なことに奇妙な視線がクロラを追ってくることはなかつた。

監獄へと続く路みちは一本道である。見晴らしがよく

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。